

『動閑茶湯書』の解説と校注（その一）『露地之書』の要旨

解説 仙台藩茶道石州流清水派宗家

（故）十世 大泉道鑑

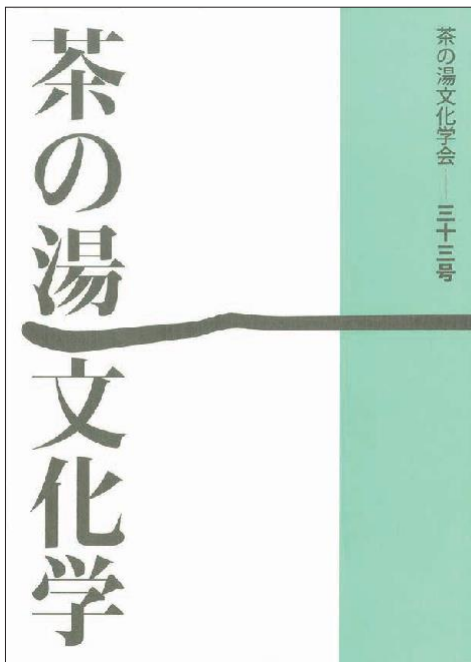
十一世 大泉道鑑

校閲 元仙台市博物館長 東海林恒英

わび茶を大成した利休は、茶庭を露地と呼び、仏心を露出する仏界と説いた。片桐石州は、このわび茶を色濃く醸し出した石州流を大名茶として確立させた。仙台藩茶道石州流清水派（当流）の茶道頭二世清水動閑は、石州のもので十三年間修行して、『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）及び『動閑茶湯書』（十八冊）を著わした。この十八冊の著書の中に、『露地之書』が含まれている。

この『露地之書』の内容は、その冒頭の「佐藤將監屋敷」及び「豊前之一老伊織路地」の図が記され、これらに続く第一条には、茅門の柴垣に梅の木を植え添えた際に、その心を表現した「和歌」が詠まれている。第二条以下には、露地の作庭では最も重視される役石などの石組、砂利や砂の使い方、庭木の植え方、松葉の敷き方、塵穴の掘る場所

とその作り方、箒を掛けるための釘等全てで二十七条にわたり、その作業心得からある所には具体的な寸法までが記載されている。従って、この文献は当流の歴代の茶道頭・師匠が作庭に深く関わった文化財庭園・茶庭の特徴を歴史的に解明する研究だけではなく、他の流派の作庭に関する資料としても極めて重要な文献であり、今回が解説されて初めて一般に公表されるものである。



この詳細は、『茶の湯文化化学』三十三号を参照下さい。